

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

Funky Corner

文・撮影●波多 利朗 text and photo by Hata Toshiro
 (URL) <http://www.funkygoods.com/>
 (E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jp

濃い系Psionの世界 (其の5) Early-Psionの系譜： Organizer-I、IIの世界 (後編)

🌀 ハーフ版カメラのこと

最近、また銀塩写真を撮影し始めた。以前の
 前フリでも述べたように、筆者は常日頃コダック
 のデジカメを愛用しているのだが、元々は銀
 塩カメラ使いの人間だ。初めて使った銀塩カメラ
 は、ブローニー版のリコーフレックスモデルIIIBであり、
 ハーフ版カメラとして最初に用いた製品は、小学生の時
 に買ってもらった名機「オリンパスペンEES (1968年製)」
 である。このカメラを握りしめ、嬉々として大阪万博見
 物に行ったものだ。その頃、フィルムはまだ高価な代物
 で、1コマずつ大切に撮影していた時代である。従って、
 1本のフィルムで倍のコマ数が撮影できるハーフ版カメラ
 は、庶民の間で爆発的に普及したものだ。

フィルムの品質が今ほど高くなかった当時は、ハーフ
 版カメラはスナップ写真専用としての位置付けが強く、
 画質もそれなりであったが、最近のフィルムは品質的に
 格段に進歩しているため、ハーフ版といっても侮れない
 画質の撮影が可能になっている。筆者は商売柄、ロシア
 製カメラを使うことが多いが、比較的人気の高い現行製
 品である、BELOMOのAGAT-18Kなど、とてもハーフ版
 とは思えないような写りを楽しめる。

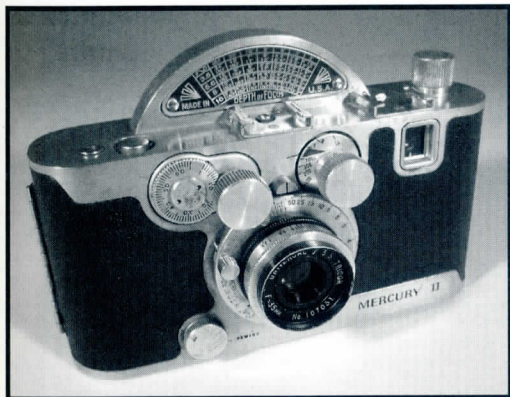
そんなわけで最近ハーフ版カメラを持って街をぶら
 つく機会が多いのだが、最近のお気に入りにはアメリカ・
 ユニバーサルカメラが製造した、極めて古典的なハーフ
 カメラ、Mercury II (Model CX) だ。このカメラはクラ

シックカメラヲタには有名な製品だ (写真A)。

米UNIVERSAL CAMERA Corp.が発売したMercuryシ
 リーズには、Model CC、CC-1500およびCXの3種類が存
 在するそうだ。Model CCが発売されたのは、なんと1938
 年のこと。このモデルでは特殊なフィルムを使う仕様と
 なっていたが、1945年に発売されたModel CXからは現
 在の一般的なバトローネが使えるようになる。

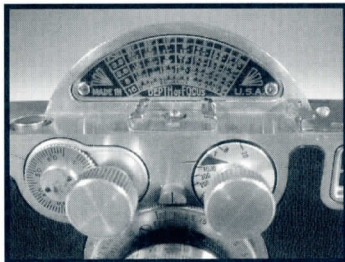
さて、このカメラの一番の特徴といえば、その外観で
 であろう。なぜに軍艦部に扇型の突起が付いているのかと
 疑問に思ってしまうのだが、実はこれ、シャッターメカ
 が出っ張っているのである。このカメラのシャッター構造
 はロータリーフォーカルプレーンシャッターと呼ばれる特
 殊なもので、2枚の円盤を回転させて露光する仕組みに
 なっている。それぞれの円盤にはスリットが設けられてお
 り、その間隔を変えることで、シャッタースピードを変
 化させるといふ、王様のアイデア的製品なのだ。軍艦部
 の突起内部には、このシャッター円盤が格納されている
 のである (写真B)。

この方法は高速シャッター制御に適しており、終戦前
 後の製品であるにもかかわらず、1/1000秒というシャッ
 ター速度を実現していた (ちなみに、Model CC-1500では、
 ナント! 1/1500秒まで搭載していた)。2枚のシャッター
 幕を横方向に走行させる、ドラム型フォーカルプレーン
 シャッターでは、このような高速シャッターを実現させる
 ためには極めて高い加工精度が要求されるのだが、ユニ
 ークな発想で比較的簡単に実現してしまったところが素



◻ MERCURY IIの外観

古典的ハーフカメラ、MERCURY II (1945年製造)。アメリカ・ユニバーサルカメラが製造した、極めてユニークな機構を持った製品である

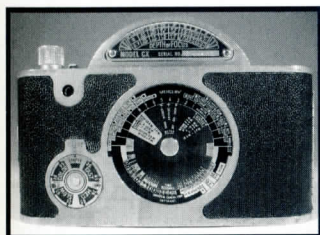
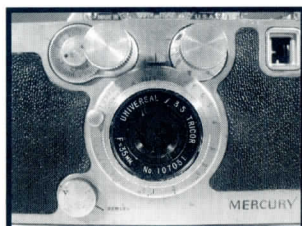


◻ MERCURY II 軍艦部のアップ

デザイン上の特徴となっている軍艦部の扇型の出っ張り。この中に円盤型シャッターが格納されている。表面には被写界深度が表の形で記載されている

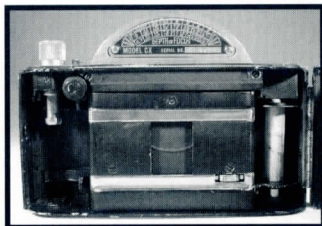
◻ MERCURY II レンズ周辺部のアップ

フィルム巻き上げ、シャッター速度調整等の操作系は、すべて前面パネルに集約されている。レンズはTricor f3.5



◻ MERCURY II 背面

フルメカニカルのマニュアル露出計(板?)を搭載した、MERCURY IIのバック。使い慣れると、とっても便利?



◻ MERCURY II 内部

回転円盤シャッター機構を持つMERCURY IIの内部。金属製のシャッター幕が見える。一見、35mmフルサイズカメラのように見えるが、ハーフサイズカメラである

晴らしい。なおかつ、このシャッターは動作時の振動が少ないため、たとえば手持ちのスローシャッターで夜景を撮影する際など、手ブレがしにくいという特徴もある。

本体の形もユニークだが、操作系も今のカメラには見られない特殊な仕様となっている。まず、シャッター速度の設定やシャッターチャージダイヤル、フィルムカウンタ等の操作系が、前面パネルに集中している。軍艦部にはフィルム巻き取りダイヤルとシャッターボタンが配置されているだけだ。レンズはTricor f3.5、35mmが搭載されるが、ハーフ版であるため35mmフィルムカメラに換算すると50mm程度と、若干狭い(写真C)。また、本体背面には、簡易型の露出計も装備されているので、便利である(写真D)。

さすがに通常の35mm版フィルムカメラで、このロータリーシャッターメカを搭載することは、回転円盤が大きくなりすぎてしまい実現不可能である。ハーフ版だからこそできたこの機構は、今見ても十分斬新な設計だ(写真E)。

さて、今号ご紹介するOrganiserの周辺機器も、PDA初期の製品らしいユニークなものが多い。それらの中から、パソコンとのリンクに使用する製品と、専用のプリンタ2種、拡張バッテリーアダプタ、Datapak Formatterとい

った製品をご紹介しよう。また、Organiser-IIのOEM製品も入手したので、こちらも併せて取り上げてみたい。



◻ Organiser-II用通信セット、Comms Link

PDAとしては、PCとの接続は必須の機能である。特にOrganiserシリーズのように、PC本体と直接データをやりとりできるメディアを記憶媒体として搭載していないモデルであればなおさらだ。周辺機器紹介の最初として、最初にPCとの通信環境を取り上げてみよう。

Organiser-IIシリーズとPCとを接続するためには、Comms Linkという接続ソフトウェアを使用する(001)。

Comms Linkは、PC側の通信ソフトとComms Link Cableと呼ばれる専用の接続ケーブル、ACアダプタおよびマニュアルから構成される。専用のケーブルは、Organiser-II本体上部に設けられたI/Oコネクタ(コミュニケーションポート)とPCのRS-232Cコネクタとを接続するためのもので、PC側コネクタ形状によりD-Sub 9Pinと25Pinの2種類がある。Organiser-II側の接続コネクタはボックス形状となっており、外観は極めて無骨だ。なんか研究室で作られた試作モデルを見ているかのようだ。



Comms Linkの構成

Organiser-II用のPC通信キット、Comms Linkの構成。専用ケーブル、ソフト、ACアダプタ、マニュアルから成る

通信時には消費電力が大きくなるため、コネクタにはACアダプタ接続用のコネクタも搭載されている。通信時には、ここにOrganiser-II用のACアダプタ（12V DC、1,000mA、外側マイナス極性）を接続する（002、003）

使用する際は、Organiser-II本体の電源をOFFにした状態で、ACアダプタを付けたComms Linkケーブルをコミュニケーションポートに突き刺す。本体の「ON」ボタンを数回押すと、メインメニューに今まで無かった「COMMS」という項目が現れる。これがOrganiser-II本体側に内蔵されている通信アプリケーションだ。普段は表に出ていないが、ケーブルを接続すると出現するという仕掛けである。

「COMMS」を起動させると、「TRANSMIT」「RECEIVE」「SETUP」といったサブメニューが出現する。起動時はまず「SETUP」に入り、9600ボー、パリティ無し、DATA+8ビット、STOP=1ビット、XON、PROTOCOL=PSIONと設定する。次にPC本体側でComms Linkのソフトウェアを起動する。DOSのコマンドライン上で「cl.exe」と打つことにより、Comms Linkが起動し、下記メッセージが出力されて、PCがサーバとして機能する。



Comms Linkのコネクタ部のアップ
Organiser-II上部のコミュニケーションポートに接続するコネクタのアップ。なんか試作モデルを見ているような、無骨な形状

Psion Organiser II Comms Link Server - Type 'q' to quit

この状態で、Organiser-II側からファイルやOPLをPC側に送信したい場合には「TRANSMIT」、PC側からファイル等を受信する場合は「RECEIVE」を、それぞれ実行すればよい。送受信の場合は「FILE」か「PROCEDURE」かを聞いてくる。その後、ファイル名を指定し実行すると、PC側画面上に

Running FTRAN Server

と表示され、ファイルの転送が実行される。基本的な操作はすべてOrganiser-II側で指示し、PC側はサーバモードとしてクライアント側からの要求を処理するという形で通信が行われる。

The Organiser用通信セット、Link-Up Pack

さて、Organiser-IIの場合には、Comms Linkというスマートな方法で、PCとの接続を実現していたが、The Organiserの場合はどうだったであろうか？ここにThe Organiser用のPC接続セット「Link-Up Pack」があるので、さっそく見てみることにしよう（004）。

まず最初に箱を開けてビックリ！ ナナなんやねん、



Comms Link接続状況

Organiser-II上部に設けられたI/F用コネクタに、専用ケーブルをズボッと差し込む。そしてACアダプタのコネクタを接続すれば、準備完了！



Link-Up Packの構成

The Organiser用のPC接続キット、Link-Up Packの商品構成。専用ケーブル、Linkソフトを内蔵したDatapak、マニュアルから構成される



Link-Up Cableのアップ
まるでアマチュア工作を思わせる、Link-Up Cableのコネクタ部分のアップ。Datapakからケーブルが生えているという表現が、一番適切か？ それにしてもステエ製品！

これ？って感じのケーブルが無造作に格納されている。PC側接続コネクタは普通のRS-232C用のD-Sub 25Pinであるが、The Organiser側はDatapakを改造したものになっているのだ。しかも、使用されているケーブルは、秋葉原で1mナンボで売られているカラフルなフラットケーブルそのもの。これはもう、とうていメーカ製の商品とは思えない手作り感覚満点のセットである。Organiser-IIと異なり、専用のコミュニケーションポートを有していないThe Organiserでは、このように2基あるDatapak搭載スロットのうちの1つを用いて、PCとの通信を行っていたのである (005)。

さらに、The OrganiserではOrganiser-IIのように本体ROMに通信ソフトが内蔵されていない。従って、PCとのリンクを行う際には、Link-Up専用通信ソフトが入ったDatapakを、スロットに装着する必要がある。すなわち、PC通信を行うためには、2基あるDatapakスロットがすべて埋まってしまうのだ。これでは、普段データを保存するために使用しているDatapakの内容をPCに転送することができないじゃないか？という疑問が生じるが、そこは良くできており、通信ソフトは一度マシンにロードしてしまえば、後はRESETコマンドを送らない限りメモリに常駐してしまう。従って、常駐後に通信ソフトのDatapakを抜き取り、普段使用しているDatapakに差し替えればOKなのだ (006)。

さて、Link-Up Packには、接続ケーブル、通信ソフトROM、取り扱い説明書の3点が梱包されている。ここで疑問に生じることは、パソコン側の通信ソフトはどうするのか？ということであろう。マニュアルによれば、IBM PC互換機に接続する場合はパソコン上でBASICを起動させて、マニュアル記載されているORGCOMM.BASという44行ほどのプログラムをポコポコ打ち込んで走らせる！となっている。なんか、いきなりBASICが出てくるというのも時代を反映しており面白い。

マニュアルにはIBM PC互換機以外にも、ACT Apricot computersやSinclair QL computer、ACORN COMPUTER



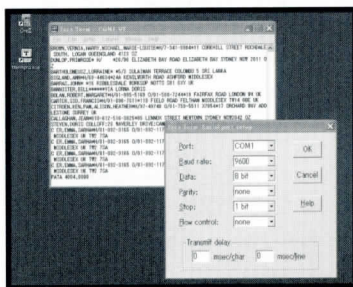
Link-Up Packを装着したところ
The OrganiserにLink-Up Packを装着すると、こんな感じになる。上のスロットはケーブル、下のスロットはLinkソフトPackに占有される。ただしソフトPackは、一旦本体にロードすれば、取り外しできる

のBBC Model Bといった懐かしいOld PCとの接続方法が記載されている。またシリアルプリンタも接続可能で、EPSONのFX 80という機種との接続方法も載っている。

さて、初代Organiserを用いてPCと通信するのはどれほど大変かを実感するために、さっそくLink-Up Packを使ってみよう。まず、Link-Upケーブル接続用のDatapakと、通信ソフトのDatapakをThe Organiserのスロットに装着する。Link-UpケーブルをPCのRS-232Cコネクタに接続する。次にOrganiserの電源をONにして、MODE/HOMEキーを数回押すと、新しいメニューである「SETUP」と「RESET」という2項目が現れる。SETUPメニューで、RS-232Cの基本パラメータを設定する。ここでは、9600ボー、パリティ無し、8ビット、ストップビット1、フロー制御無しを選択しておく。

SETUP終了後、PC側のターミナルソフトを立ち上げる。さすがにBASICを使用するのは億劫なので、ここではTeraTerm Proを使用してみた。ポートとしてシリアルを指定し、上記のパラメータに設定すれば完了である(画像1)。

ここまで準備すれば、Organiser側のメモリに通信ソフトが常駐しているので、通信ソフト用Datapakは抜いても良い。そこで、通信ソフトのDatapakを、通常Organiserのデータ保存用として使っているDatapakに差し替えることにする。MODE/HOMEキーを押すと、以下



画像1 TeraTermを使った通信状況
Windows XP上でTeraTermを起動させ、The Organiserと接続しているところ。本来はBASICのターミナルソフトウェアで通信を行う仕様になっているのだが、さすがにそこまではお付き合いできない……



007
Organiser-II用ACアダプタコネクタ
Organiser-IIのコミュニケーションポートに接続して用いる、ACアダプタコネクタのアップ。最も単純なオプションパーツと言えるであろう

のメニューが現れる。

- SENDL : Sending a line (1行分データの送信)
- SENDF : Sending a file (内蔵されているファイルの送信)
- SENDP : Sending a program (プログラムもしくはプロシジャーの送信)
- RECL : Receiving a line of information (1行分のデータの受信)
- RECF : Receiving a file of information (1ファイル分のデータの受信)

SENDLコマンドを実行してOrganiserのキーよりデータを入力すると、PC側ターミナル画面にデータが表示される。同様に、Organiser側で送信ファイルを指定し、SENDFコマンドを実行すれば、PC側ターミナル画面にファイル内容が表示される。同様に、Organiser側でRECFコマンドを実行し、PC側でファイル送信を行うと、Organiserにファイルを送ることが可能だ。

余談だが、このLink-Up Packは極めてレアな製品のようだ。ここに取り上げたものは、柴隠上人 稀瑞冥閻守 (Kerberos) 氏がe-Bayにて、激戦の末落札したものであるが、落札後数人から「不要なら是非オレに譲ってくれ!」という不条理なメールをもらったそう。必要だから落札したんじゃない! マツカもう……。

Organiser-II用ACアダプタコネクタ

続いてOrganiser-II用の小物のご紹介。Organiser-IIにACアダプタを接続するためのアクセサリである。品番等の記載は無い。Organiser-II本体には標準でACアダプタコネクタが搭載されていない。ACアダプタを接続するためには、このアダプタコネクタをOrganiser-II本体上部に設けられているコミュニケーションポートに装着して行



008
Organiser-II用ACアダプタコネクタの接続状況
ACアダプタコネクタとOrganiser-II本体とは、このように接続する。Organiser-IIのコミュニケーションポートは、多彩な用途に使用できる万能ポートだ!

う。PC通信キット「Comms Link」の項目でもご紹介したが、このアダプタはComms LinkコネクタからPC接続用ケーブルを省いただけの構造となっている。ジッポのライターほどの大きさがあるこのアダプタの中には、電源安定用のダイオードが1個搭載されているだけ。Organiser-II用の周辺機器として、おそらく世界で最も簡単な製品であろう (007, 008)。

Organiser-II用拡張バッテリーユニット、DT/CELLPAK

Organiser-IIシリーズは現場のデータ収集等にも良く用いられた端末であった。そのせいか、バッテリーの持続時間を延ばすため、専用の拡張バッテリーユニットなるものも製品化されていた。ここにご紹介するものは、Dynamics Technologies Inc.製の拡張バッテリーユニット、DT/CELLPAKである。

このユニットであるが、装着するとOrganiser-IIの保護用カバーを下へ伸ばした状態で固定することになる。そのため、本体はかなり長くなってしまおうのだが、実はこの保護用カバーの内部に拡張バッテリーを格納しているので、致し方ない (009)。

カバーを外すと、内部にNi-Cdバッテリーユニットが格納されている。ユニットは7個のバッテリーを束ねた形にな



009
拡張バッテリーユニットを搭載したOrganiser-II
Organiser-II用拡張バッテリーユニット、DT/CELLPAKを装着したOrganiser-II。長い、長すぎる! しかもこの状態でしか使えない……



010

拡張バッテリーユニットの制御基板

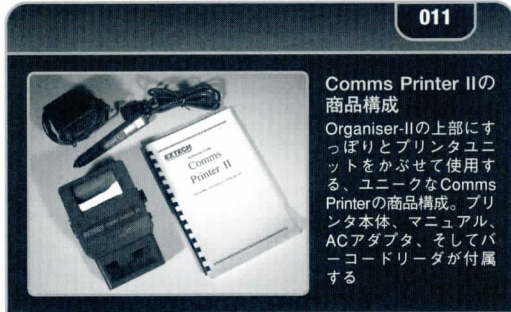
拡張バッテリーユニットの制御基板は、Organiser-II本体に何ら加工することなく装着することができる

っており、本体に接続するためのケーブルが付いている。一方本体側とは言う、これが実に巧妙な作りになっているのだ。本来006P電池を格納する電池室部分に、拡張基板が取り付けられているのだが、本体に一切改造を加えること無く装着できるように工夫されている。基板そのものは12VのDC入力を9Vに降圧するユニットで、006P電池を接続する端子をそのまま利用しているのだ。またACアダプタ入力用のコネクタも備えている。この基板で、バッテリーユニットの充電制御を行っているのである。ACアダプタはこのCELLPAK専用の12V、外側プラス極性のものを使用する。Organiser-II本体専用ACアダプタは外側マイナス極性だから、規格化も何もあつたもんじゃない。ガレージキットのような商品が、のどかだった当時を反映している (010)。

Organiser-II用プリンタユニット、Comms Printer II

Organiser-II上部のコミュニケーションポートにプリンタをドッキングさせてしまおうという、幾分強引な構成の専用プリンタ、COMMS PRINTER 42である。メーカーはEXTECH DATA SYSTEMSというところ。プリンタ本体はまるで「被り物」のコスプレを見るがごとくで、大変奇妙な外観だ。プリンタとOrganiser-IIとは、合体メカよろしく接合する。面白いのは、合体後にOrganiser-IIの液晶ディスプレイが見えるように、プリンタ本体下部にはウィンドウが設けられていることだ。プリンタはモバイル環境での使用を想定しており、本体背面には単三タイプの800mAh、Ni-Cd充電電池4本バックが装着される。プリンタには専用のACアダプタが用意されており、これを使用して充電を行う (011)。

使用方法であるが、Organiser-IIのコミュニケーションポートを利用するため、基本的にはシリアル転送でプリ



011

Comms Printer IIの商品構成

Organiser-IIの上部にすっぽりとプリンタユニットをかぶせて使用する、ユニークなComms Printerの商品構成。プリンタ本体、マニュアル、ACアダプタ、そしてバーコードリーダが付属する

ンタにデータを送る仕組みを取っている。本体にプリンタを接続した後電源を入れると、DEVICEメニューにPRINTERが表示される。ここでEXEキーを押せば、プリンタの電源が入る。

次にCOMMSメニューでSETUPに入り、MODEキーからRESETコマンドを押して通信環境をリセットする。これで準備完了だ。印字する場合は、COMMSメニューからTRANSMITを選択する。内蔵されたデータを印字するのであれば、FILEを選ぶと、ドライブ名と本体に格納されたデータファイル名が画面に出力されるのでEXEキーを押せば良い。ジーゴジーコといううるさい音がして、ファイルの内容がロール紙に印字される。プリンタの電源をOFFするには、メインメニューのDEVICEからPRINTERを選択しNコマンドを送れば良い。

さてこのプリンタであるが、機構的にはドットインパクト方式を採用している。印字は1行あたり42キャラクタで、24キャラクタバージョンも存在した。ロール紙は2枚複写タイプで、インクリボンにはEPSONのERC-09を使用する。このインクリボンは現行製品として入手可能である。プリンタの左側面にはシリアルコネクタが、また右側面にはバーコード接続用コネクタが搭載されている。簡単なOPLを作成することにより、バーコードで商品情報を読みとってOrganiser-II本体に格納し、それらをまとめて印字するといった一連の作業ができるように構成されている。なお、本機にはDATA LOGIC製のP10バーコードリーダが付属していた (012、013、014)。



012

Comms Printerのメカ部

ロール紙格納カバーを外したところ。ドットインパクト方式を採用しており、1行あたり42キャラクタの印字が可能であった



013

Comms Printer本体側面のコネクタ

Comms Printer本体側面には、ACアダプタコネクタとバーコードリーダー接続コネクタが搭載される。反対側には、RS-232Cコネクタが実装されており、プリンタ使用时でもPCとのリンクができるようになっている。



014

Comms Printerを装着したOrganiser-II

Comms Printerを装着すると、このように極めて頭でっかちのスタイルになる

🔧 プリントユニット、 ORGANISER II PRINTER

前出のComms Printer IIよりも、もう少しプリンタらしい製品が、このORGANISER II PRINTERである。印字するロール紙の幅も広くなり、20、40、60、80コラムの印字が可能となった、サーマルヘッドタイプのプリンタだ。外観はOrganiser-IIと同色・同デザインでコーディネートされており、右側部分にOrganiser-II本体を合体させて使用する。どうも、Organiser-IIのプリンタには、合体メカが多い (015)。

🔧 **Funky**
プリンタ本体とは、Organiser-II上部のコミュニケーションポートを介して接続する。この構成はComms Printerと同じである。本体をプリンタに搭載するメカがかなり凝っている。まず本体の保護カバーを取り外して、上部にあるコミュニケーションポートのスロットカバーを開ける。次にプリンタ本体に設けられたトレイに本体を差し込み、そのままスライドさせるとプリンタ側に出ているコネクタが挿入されるという仕組みである。なお、Organiser-II本体をプリンタに接続した状態でも、PCとのリンクができるように、プリンタ左側面には、本体上部と同じI/Fコネクタが設けられている。芸が細かいな…… (016、017)。

プリンタはモバイル環境でも使用できるよう、単三タ

イプのNi-Cd充電電池を6本1パックにしたものを搭載している。これで本体に7.2Vの電源を供給することになる。Ni-Cdバッテリーはプリンタ本体底面の電池室に格納されており、ACアダプタ接続時に充電するようになっている。

このプリンタを使用するためのドライバは不要で、Organiser-IIを差し込むことで、プリンタから約2.5KBのドライバソフトがOrganiser-IIにロードされるようになっている。この辺りはComms Printerと同じ仕組みだが、極めて洗練された設計と言える。

紙送りやLCD画面に表示されている文字を印字するといった簡単な操作は、Organiser-IIのキーボードから直接実行できる。OPLプログラムのリストを印字する際には、メインメニューからPROGメニューに入って行う。Organiser-IIのメインメモリ内部に格納されたデータレコードを印字するためには、OPLで印字プログラムを書かなくてはならない。プリンタのマニュアルにはプログラムリストが掲載されているが、25行ほどの短いものだ。しかし、データレコードの印字にプログラムを書けというのは、いかにも不親切。この辺りが原始PDAらしいと言えよう。

残念ながら本プリンタは不調のため動作できない。Comms Printerよりも印字ロールが大きいので、実用的には適していると思うのだが。仕様によると、プリンタメカニズムはEPSON製を使用しており、サーマルヘッドは5×9ドット構成だそう。プリント領域は横100mm。本体をばらしてみたら、メインCPUにNEC製の有名なシン



015

ORGANISER II PRINTERの外箱

こちらは、もう少しプリンタらしい格好をしたプリンタ、ORGANISER II PRINTERの外箱。もうボロボロだけど、一応レア物ということで、写真だけでも掲載しておこう



016

Organiser-IIの装着状態

ORGANISER II PRINTERへはこのようにOrganiser-II本体をトレイに挿し込んで装着する

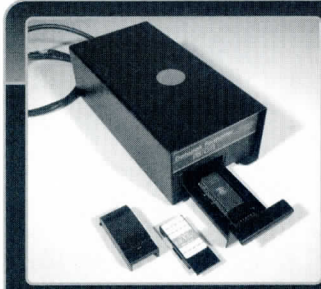
017



ORGANISER II PRINTERの使用状況

無事合体できると、このような感じになる。プリンタ付きの端末装置といった感じだ

018



PSION Datapak Formatterの外観

Psion純正のDatapak Formatter。実は単なる紫外線消去装置なのだが、Psionのロゴが入っている点がポイント!

グルチップマイコン、87ADこと78C10が使用されていた。本体パッケージの中に入っていたレシートを見ると、1989年3月2日にロンドンで購入したものとなっている、レシート入れ忘れるなよなあ……。

PSION Datapak Formatter

The Organiser、Organiser-IIでは、Datapakに紫外線消去タイプのEPROMを使用していた(前編参照)。このDatapakの内容を消去する装置として、Psion純正のDatapak Formatterなるものが存在した。たいそうな名称が付いているが、ナンのは無い、単なるROMの紫外線消去装置である。ただ、Psion純正というところがミソというわけだ。これがあれば、Psionが郵送で行っていたDatapak消去サービスを利用しなくても消去できるという便利グッズだった(018)。

Datapak Formatterは鉄製の黒い箱で、電源も内蔵しているため非常に重い。前面には引き出しが付いており、ここに内容を消去したいDatapakを、格納されているROMデバイスをむき出しにした状態で置く。後は引き出しを入ると30分間のオートタイマーが起動し、紫外線を照射するという仕組みだ。

Organiser関連のDatapakには、どれも上部に丸い穴が開いており、通常はシールで被われているのだが、この

穴は紫外線消去の際に使用する。

本体はイギリス製なので、240VのAC電源で駆動する。背面には紫外線発生装置のため危険である旨の注意書きが、しつこく記載されている。前面の引き出し部分に記載されたPsionのロゴは、The Organiserの時代に使用されていた旧ロゴだ。イギリスより入手したものだが、今となってはかなり珍しいものではないだろうか?(019)

さて、コレクターとしてではなく実用としてDatapakをフォーマットするにはどうするか? これは比較的簡単である。要は紫外線消去装置を購入してくれば良い。組み込み型システムの開発に携わった方であればお馴染みであろう。一例としてここにご紹介する製品は、LEAP ELECTRONIC CO., LTD製のEPROM ERASER MODEL LER-121Aである。ACアダプタ電源で使用できる比較的小型なタイプだ。購入先は、かの有名な秋葉原の秋月電子通商。UV-ROMイレーサの商品名で5,800円で発売している。これがあれば、PROMタイプのDatapakをいつでも再利用できるので便利である(020)。



Organiser-IIのOEM製品、RE/MTL611 Computer

これは珍しい、Organiser-IIのOEM製品である。メー

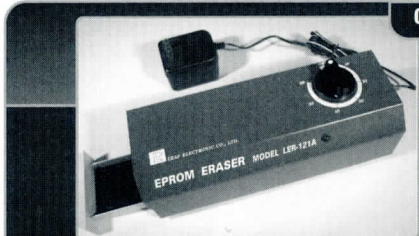
019



PSION Datapak Formatterのロゴのアップ

Datapakトレイの上部には、Psionのロゴが記載される

020



LEAP ELECTRONIC製EPROM ERASERの外観

実用で使用するならば、こちら。秋葉原は秋月電子にて購入したLEAP ELECTRONIC CO., LTD製のEPROM ERASER、MODEL LER-121A



021

RE/MTL611 Computer
Organiser-IIのOEM製品、RE ELECTRONICS製のRE/MTL611 Computer。本体外観はオリジナルと寸分違わないが、色がマツタケ異なる。LZをベースにした製品で、DatapakとしてFlash Memoryが使用可能



022

RE/MTL611 Computerの背面銘板アップ
オリジナルと異なり、本体背面には銘板が添付されている

カはRE ELECTRONICSという会社。残念ながらWebで検索をかけても、それらしいメカは発見できなかった。製品そのものはOrganiser-II LZ64をベースにしたもので、本体の色がダークブルーとなっており、液晶周りにPsionのロゴが入っていない以外は、本家とまったく同じである。電源投入時にはLCD画面にちゃんと「C Copyright Psion PLC. 1986」と表示される (021、022)。

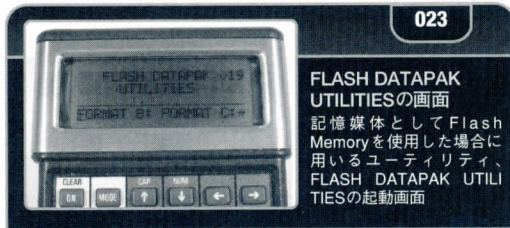
DatapakとしてFlash Memoryが使用可能で、Flashを搭載すると、メインメニュー上にFLASHという項目が追加される。これはFLASH DATAPAK UTILITIESで、Datapak スロットBとCに搭載したフラッシュメモリのフォーマットを行うことができる (023)。

RE/MTL611には2基のFlash Datapakが搭載されている。このメモリもRE ELECTRONICS純正のもので、品番はRE/IS128。しかし、何のことは無い、Psionが発売していた128KBのDatapakにシールを添付しただけのものとなっている。ちなみにこの128KBのFlash Datapakは、今となっては大変貴重なもののように、ほとんど見かけることが無い (024)。

🔍 おわりに

「濃い系Psionの世界」と題して、マイナーなPsion端末をご紹介してきたが、今回をもって一休みすることにしよう。さすがに5回連続で掲載していると、書いている本人も食傷気味になる。恐ろしいことに、回を追うごとに端末のマニア度がアップしてきたため、最初の頃ご紹介したSienaやHC110などは、今となっては珍しいとも何とも感じなくなってしまったことだ。いやはや、馴れというのは怖いものだ。しかし、Organiserシリーズにはぞっこんハマりまくったため、いつのまにかOrganiser-IIがマトリックスIIリローデッドに出てくるエージェント・スミス並みに増殖してしまい、大変なことになってしまっている (025)。何事にもあまり深みにはまらないようにするのが肝心だと切に思う今日この頃なのであった……。なお、今回ご紹介できなかったOrganiser-II用のさまざまなアプリケーションソフト群や、Psion MC-400は、別の機会に取り上げてみたい。

さて、次回であるが、ちょっと趣向を変えて、ユニークな入力デバイスを搭載したAGENDA端末と、OnHand PCについて書いてみようと考えている。



023

FLASH DATAPAK UTILITIESの画面
記憶媒体としてFlash Memoryを使用した場合に用いるユーティリティ、FLASH DATAPAK UTILITIESの起動画面



024

Flash Datapakの外観
RE/MTL611 Computerに搭載されていたFlash Datapakの外観。128KBの容量を持ち、Psion純正のフラッシュバックのOEM製品である



025